

俳句

大津俳句会

雲を踏みつつ蜘蛛の囀の出来上がる

井芹眞一郎

公園を歩く人増え明易し

家入元子

昨日見て今日又同じ場所に蛇

市原初女

肥後菖蒲追慕の色に咲き揃ひ

江藤みら

枇杷熟るる人より先にさわぐ鳥

坂本セキ

山脈の風車の廻る夏の風

高見ヒサ子

どくだみの良く効きさうな匂ひかな

原田順子

空梅雨に干乾びてゆく我がボエム

武藤規子

また母の背の丸くなりあやめぐさ

森山美穂子

涼風の景を整へ去ぬ庭師

渡邊佳代子

俳句

つのはな句会

六月曇天から猿田彦が降ってくる

星永文夫

文豪の清水飲んで阿蘇路を吟行す

梅木トキエ

湧水の懐かしき里白菖蒲

布山妙子

偏西風荒れる国盗り夏本番

志賀孝子

楼門の高さに阿蘇の夏すわる

田上公代

二拍して初夏の奥より神を呼ぶ

木庭杏子

楼門をくぐって夏の風つかむ

上杉波

ひとことの呪縛にはまる車前草

岩本慶子

夏木立葉裏に生まれる反戦歌

矢嶋道子

国境を跨いで眺む夏の月

水野春子

日永一日子らと遊んで夜の月

塚本洋子

短歌

大津短歌会

四家族集う連休楽しみに

春浅き野に蓬摘みおり

渡辺佐代子

ふと目覚め眠れぬままに母恋うる

浴衣縫う母鯖焼く母を

坂本果子

レジに立ち釣銭返す若者の

細き指先羨しく見ゆる

岩下文代

庭に咲く馬酔木の房の白き花

触れて転べば鈴の音微か

豊岡ミツル

雪どけの小川に芽ぶく猫柳

そのふわふわの綿毛恋しも

吉永恵子

紫の気品漂う薊花

なぜか棘もち野辺に咲きけり

小平善行

短歌

万年青短歌会

亡き父が桑摘みながら歌ひいし

アメージングレースの曲久々に聴く

合志妙子

肌寒き朝に出掛けし植木市

退職記念の枝垂れ梅求む

中山春代

老岐の海波しずかにて訪れし

曾孫祝ふと天旗を掲ぐ

山内信子

緑増す山の若葉も色さえて

旅路はるかに阿蘇の路行く

長野和子

美しく早苗そよぎし峡の田に

山が映りて水のキャンパス

今村光子

いづことも見えぬ雲雀の高啼けば

麦野のずらに夏の日は照る

河北幸一

たっぷりと大正ロマンにひたりつつ

ハイカラババさま今を生きゆく

吉田良子

かたくなに蕾のままのしゃくなげが

淡い色せしハツとさせおり

甲斐年子